

論文の内容の要旨

**A Cognitive Network of the Middle and Related Constructions  
in English and German**

(和訳：英語とドイツ語の中間構文と関連構文の認知論的ネットワーク)

坂本 真樹

## 論文の内容の要旨

### A Cognitive Network of the Middle and Related Constructions in English and German (和訳：英語とドイツ語の中間構文と関連構文の認知論的ネットワーク)

坂本 真樹

本論の目的は、英語とドイツ語の中間構文の意味が、それと関連する構文の意味と共に織り成す複合的で動的なネットワークの中で最も適切に説明できることを示すことにある。この分析によって、従来の研究では注目されなかった中間構文の持つ新しい特徴が明らかになるとともに、認知論的ネットワーク分析の有効性も示される。また、人間が主体的に環境と相互作用し、事態を解釈してゆくことにより、言語カテゴリーがそれに呼応して動的に拡張していることも明らかになる。

本論では、認知言語学の代表的理論である R.W.Langacker によって提唱される「認知文法」の理論的枠組みで議論を行う。認知文法では、文法的知識を、意味から自律した知識の領域として扱うのではなく、特定の形式と特定の意味との組み合わせを単位として成立する一種の記号体系を構成するものと考えている。認知文法における言語表現の意味とは、客観的事態から一義的に決まるものではなく、認知能力に基づく人間の主体的な事態解釈が慣習的に組み込まれたものである。このような言語観に立つならば、一つの事態について複数の事態解釈が可能であり、その事態解釈と結びつく複数の文法形式があると想定される。また、一見異なるように思われる複数の事態が、同じ文法形式によって表されているならば、その複数の事態に関する解釈の間には関連性があると想定される。本論では、このような想定に立ち、同じ文法形式を示す構文の間の意味的関係を明らかにする。

このような言語観と密接に関わるものとして、Langacker の Dynamic Usage-based Model に提唱されるようなカテゴリー観がある。このモデルでは、言語カテゴリーは複合的なものであり、拡張やスキーマの抽出といったプロセスにより、典型性の異なる成員が

典型的成員を中心にネットワークを形成している。複数の類似した経験の間に存在する共通性を具現化するスキーマが抽出され、それが慣習化される。慣習化が進むとプロトタイプとしてさらに新しい経験をカテゴリー化してゆく。このようなプロセスが繰り返されることにより、慣習性と抽象度の異なる構造がカテゴリー化の関係で結び付けられたネットワークが形成される。典型例と非典型例は、直接的な結びつきがなくとも、一つのネットワークを形成していると考えられる。このカテゴリーの構造は、人間が一つ一つの経験を解釈してゆくことにより動的に変化してゆくものであり、どのような拡張をするかは慣習化によるところが大きい。このようなカテゴリー観に立つことにより、同じ言語現象に関しても、従来とは異なる説明が可能になるのである。

本論で扱う構文は以下の例に示されるものである：

英語

中間構文：(1) This book sells well. (この本はよく売れる)

道具主語中間構文：(2) This knife cuts well. (このナイフはよく切れる)

能格構文：(3) The door opened. (ドアが開いた)

Energetic と解釈される自動詞構文：(4) John works. (ジョンは働く)

ドイツ語

中間構文：(5) Das Buch verkauft sich gut. (この本はよく売れる)

this book sells itself well

'This book sells well.'

非人称中間構文：(6) Es fährt sich gut auf der Autobahn. (このアウトバーンは走り易い)

it drives itself well on the freeway

'You can drive well on the freeway.'

Lassen-中間構文：(7) Das Buch läßt sich gut verkaufen. (この本はよく売れる)

this book lets itself well sell

'This book sells well.'

非人称 lassen-中間構文：(8) Es läßt sich gut auf der Autobahn fahren.

it lets itself well on the freeway drive

'You can drive well on the freeway.'

(このアウトバーンは走りやすい)

再帰的能格構文：(9) Die Tür öffnet sich. (ドアが開く)

the door opens itself

'The door opens.'

能格構文：(10) Die Vase zerbricht. (花瓶が壊れる)

the vase breaks

'The vase breaks.'

Absolute と解釈される自動詞構文：(11) Der Unfall geschieht. (事故が起きる)

the accident happens

'The accident happens.'

英語の中間構文は、主語＋動詞という文法形式を示す構文（以下、NP V 構文）の織り成すネットワークの中で、そしてドイツ語の中間構文は、主語＋動詞＋再帰代名詞という文法形式を示す構文（以下、NP V *sich* 構文）の織り成すネットワークの中で、それぞれ最も適切に説明できる。

英語の中間構文とその関連構文に共通する高次のスキーマは、一つの参与者に関する事態解釈と結びつく NP V 構文である。NP V 構文の典型例には、Energetic と解釈される自動詞構文と、Absolute と解釈される自動詞構文があるが、両者の境界は不明瞭である。英語の能格構文には、前者に基づいて解釈されるものと後者に基づいて解釈されるものがあると思われる。ただし、英語の能格構文の主語は、前者に基づいて energetic と解釈される傾向があるようである。一方、ドイツ語の中間構文とその関連構文に共通する高次のスキーマは、一つの参与者が動作主的な面と被動作者的な面とに概念的に区別される事態解釈と結びつく再帰構文から抽出される NP V *sich* 構文である。ドイツ語の再帰的能格構文は、このスキーマによってその他の再帰構文と結びついている。再帰代名詞を伴わないもう一つの能格構文は、主語＋動詞という構文形式をとり、英語同様、典型的 NP V 構文に基づいていると考えられる。英語と異なる点は、ドイツ語の能格構文は、Absolute と解釈される自動詞構文に基づいているということである。英語の能格構文は、ドイツ語では主語が動作主性と結び付けられる再帰的能格構文と Absolute と解釈される自動詞構文に基づく能格構文によって分担されて表される事態を覆っているのである。

次に、中間構文への拡張を見てみよう。英語の中間構文は、抽象度の高い高次のスキーマによって NP V 構文のカテゴリーの成員としてカテゴリー化されており、ドイツ語の中間構文も、抽象度の高い高次のスキーマによって NP V *sich* 構文のカテゴリーの成員としてカテゴリー化されている。同時に、英語とドイツ語の中間構文は、その関連構文から生じる具体性の高い低次のスキーマによってカテゴリー化されており、英語の中間構文は能格構文に、ドイツ語の中間構文は再帰的能格構文に基づいていると言える。eventive な状態変化を表す能格構文や再帰的能格構文から noneventive なモノの属性を表す中間構文への拡張は、主語で表される状態変化の主体のもつ属性が、状態変化という事態をコントロールしていると概念化されることによって起こる。能格構文や再帰的能格構文との境界線が不明瞭な中間構文は、主語で表されるモノの属性が「どのように状態変化が進むか」をコントロールしているという事態認知と結びつく。

さらに、英語とドイツ語で違いはあるものの、「どのように状態変化が進むか」を主語がコントロールしているという事態認知から、「どのようにプロセスが進むか」を主語がコントロールしているというスキーマが抽出され、「どのように行為が進むか」を主語がコント

ロールしているという事態認知と結びつく方向へと中間構文は拡張してゆく。そして、状態変化が際立つものほど能格構文に近く、行為が際立つものほどより中間構文らしいものとなっている。より中間構文らしい意味が慣習化されることにより、どのように人間が行為を遂行できるかを主語で表されるモノの属性がコントロールしているという事態認知と結びつく中間構文がプロトタイプとして確立する。それに伴い、従来動作主とみなされていた動詞で表される行為を行う人間が、主語で表されるモノの属性によってその行為をコントロールされる経験者として概念化される。